

JICA 東京

日本も元気にする 青年海外協力隊

[千葉・埼玉・新潟・群馬・東京 編]



世界を元気にした人は、
日本も元気にする！

その後の社会貢献

～青年海外協力隊の経験を地域のために～

開発途上国の課題解決に取り組んできた青年海外協力隊員が、海外での経験を活かして、日本国内各地の課題解決に取り組んでいます。途上国の課題解決のために、異なる文化や生活、価値観の中で活動することによって、彼らは広い視野や豊かなコミュニケーション能力、課題解決能力を磨いてきました。彼らのもつ柔軟な発想や力強さ、草の根活動で培われた魅力的な人間性、多様な経験・ネットワークは日本社会の財産です。

このパンフレットでは、東京・千葉・埼玉・新潟・群馬で活躍する青年海外協力隊OB・OGを紹介します。彼らは、いま、日本の地域社会を元気にするために奮闘しています。

「いつか世界をかえる力になる」

青年海外協力隊で培われた力は、今、日本の地域を活性化する力として活用されています。その力は、やがて大きく成長し、世界を変える力として、さらに大きく羽ばたいていくことでしょう。世界の国々ために、そして私たちの国と地域社会のために。



◎新潟県長岡市
NPO法人多世代交流館「にこニーナ」

佐竹直子さん



◎派遣国
フィリピン P03



◎群馬県前橋市
群馬県農政部 技術支援課

栗原邦泰さん

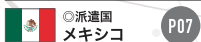


◎派遣国
ザンビア P05



◎埼玉県和光市
コミュニティカフェ“arcoiris”経営

横田明菜さん



◎派遣国
メキシコ P07



◎千葉県松戸市
学校勤務&日本語ボランティア

久保山三香代さん



◎派遣国
セネガル P09



◎東京都葛飾区
Atlier 485

阿久津千尋さん



◎派遣国
チュニジア P11



◎新潟県長岡市
公益社団法人 中越防災安全推進機構

河内 毅さん



◎派遣国
グアテマラ P13



◎群馬県前橋市
病院勤務&「群馬の医療と言語・文化を考える会」

斉藤節子さん



◎派遣国
グアテマラ P15



◎埼玉県さいたま市
アフリカを中心に事業を展開
IT専門学校ケニア
中古車輸出事業

石沼一紀さん



◎派遣国
ケニア P17



◎千葉県千葉市
千葉銀行

石井和由さん



◎派遣国
タイ王国 P18

世界を
 元気にした人は、
日本も元気にする!

青年海外協力隊

Naoko Satake

佐竹直子



(派遣国) フィリピン
(派遣期間) 1992年12月～1995年12月
(職種) 保育士

新潟県長岡市出身。フィリピン サンフェルナンドでピナツポ火山噴火後の被災地における保育環境の整備や保育者の養成を行った。

(現在)新潟県長岡市 NPO法人多世代交流館「になこーな」



▲になこーなの「健康お茶会」の様子。
3つのサロン「子育てサロン」「手仕事カフェ」が他にあります。

多分野・多世代・多地域が 協働した支援から、子育ての しやすい社会づくりを。



「子どもは社会で育つ」その社会自体をよくせねば。

長岡市内に4つある「こそだてのえき」のひとつ「ぐんぐん」。ここで子育てサロンや健康お茶会、手ごとカフェを開催するなど市の委託を受けて運営し、子育て中のお母さんたちを支援しているのが、2007年佐竹さんが仲間と立ち上げたNPO法人多世代交流館になこーなです。「にな」は長岡の郷土料理「煮菜」が由来。2月7日には「煮菜

の日」として地元のおばちゃんたちに各家庭のレシピを教えてください。「多くの世代が関わることで子育て環境もよくなり緊急時に助け合う関係もできる。」佐竹さんは中越地震の支援活動で「子育てしていく社会の縮図」に気づき、まずこれを変えていかねばと感じたそうです。



「子どもはお金に変えられない幸せを与えてくれる」
日本でも大事にしたかったことを現地で再確認し帰国。
佐竹さんは地元長岡に戻り、仲間と子育て支援のネット
ワークを次々に立ち上げ、精力的に活動しています。



▲高齢化の進んだ集落へ子どもたちの声を届けに行き、山の暮らしの工夫や遊び、季節の恵みを交流しながら楽しんでいます。

自分にしかできない子育て支援をしたい。

保育士だった佐竹さんが子育て支援を仕事とするようになったのは帰国後でした。協力隊では被災地に派遣され、他職種の隊員らと生活改善のプロジェクトに取り組みました。資金や物資の限られた中で、異なる専門性を持つ人々が知恵を出し合い工夫することで、事業がより豊かになり、さらに多くの人々が関わるようになりました。この経験は今でも佐竹さんの活動を根幹から支えています。

帰国後は、協力隊での経験を活かし、世代間のつながりを活かした「長岡子育てライン三尺玉ネット」の活動や、異なる立場、分野、世代を繋げる「長岡女子ボランティアネットワーク」を立ち上げました。

世界の平和の鍵は手の届くところにある。

フィリピンで体調を崩した時、水汲みを頼んだ近所のおじさんのとても嬉しそうなお顔、また、になこーなの活動で中越地震の被災者に「煮菜」の講師を頼んだときの笑顔から、「誰かの役に立つことはその人を生き生きさせる」ということを学んだという佐竹さん。こうした経験からになこーなの活動では「一方的に支援する側、される側の関係をつくらない」を理念として大切にしています。東日本大震災後は各地から長岡に視察に来られる方も増えました。「子どもたちが生まれ育ったところに誇りを持ち、またここで子育てがしたいと思ってくれるような場所をつくっていきたい。になこーながモデルになっているんな地域でこんな場所ができれば」佐竹さんの夢は続いています。



▲「次代の親育成事業」の一環で、中学生に命の授業をしているところ。

青年海外協力隊

Kuniyasu Kuribara

栗原邦泰



(派遣国) ザンビア
(派遣期間) 2001年12月～2002年12月
(職種) 稲作

群馬県太田市出身。2001年よりザンビア西部のモンゴへ派遣され、安定的な米生産の栽培技術指導を農民達に行った。帰国後は群馬県農政部に復帰し、集落営農支援や若手中堅農家の養成塾の運営業務を行っている。

(現在)群馬県前橋市 群馬県農政部 技術支援課



▲デモンストレーション圃場での栽培講習会

途上国での経験を 日本の農家育成へ。 熱い挑戦を群馬でも。



ザンビア

自分の出来ることを着実に。

栗原さんが稲作隊員として赴任したのは、アフリカの大陸国であるザンビア。日本で米作りの技術支援や農業後継者育成の専門学校で教官をしていたため、米作りには自信を持っていましたが、日本と気候があまりにも違う点に不安を感じながらの赴任だったそうです。ザンビアでは圃場の調査や農家へのインタビューを地道に重ね、情報

を基に栽培試験や栽培講習会を行いました。「お米以外にも色々と試してみましたね。麦や大豆、ソバもあちこちから種を取り寄せて試験栽培しました。」さらに、栗原さんは収穫した米をザンビアにある日本大使館などにも売りに行ったそうです。「栽培しただけでは収入に繋がりませんからね。一つ一つ出来ることから実行しました。」



地元群馬県にて若手農家の育成を行っている栗原さん。そこには、青年海外協力隊時代にザンビアで学んだコミュニケーション力やタフさが生きています。協力隊での経験が群馬の農家さんを支える大きな力になっています。

▲群馬の若手農家とともに都内の朝市参加



▲米の出荷前の品質管理を実施

ザンビアでの経験が日本で生きる。

「時には農機具屋になったり、米の集荷業者になったりと、とにかく実行することですね。」と栗原さん。異なる土地、文化の中、「やっちまんべー(群馬弁で、Let's tryの意味)精神」で、試行錯誤しながら奮闘した経験は今すごく活かしていると語ります。帰国後、栗原さんは群馬県農政部に戻り、集落単位で、農産物の共同生産に取り組む集落営農支援や若手中堅農家の養成塾(ぐま農業フロントランナー養成塾)の運営業務にあたっています。「ザンビアでの経験で、面の皮がだいぶ厚くなりましたね。年配のリーダーがいる農村の会議にも平気で飛び込んでいけるようになりました。」と、タフさが武器になっているそうです。

地域農業を牽引する熱いリーダーを育てる。

ぐま農業フロントランナー養成塾では、農産物の加工や商品開発を牽引するリーダーの育成を行っているそうです。「ザンビアでは日本の栽培技術を定着させるべく、現地の若者達と共に毎日デモ圃場に出て、汗を流していましたが、日本の若い農家に対しても同じ思いです。」と、栗原さんは熱心に語ります。どんな地域にも「もっと良くしたい」という熱い思いを持った農家がいる、地域農業の活性化にはそのような人材が不可欠です。「農家さんには日本の食を守っている誇りをもって頑張ってもらいたいです。私はそういう人の支援をこれからも続けていきたいです。」未来の農業リーダー輩出のため、栗原さんの挑戦は続きます。



▲毎日、現地の若者たちと共に汗を流した日々

青年海外協力隊

Akina Yokota

横田明菜



(派遣国) **メキシコ**
(派遣期間) 2010年1月～2012年1月
(職種) **環境教育**

埼玉県和光市出身。メキシコ テオセロ市役所にて既に導入されていたミズコンポストの普及活動に従事。その他、学校巡回や地域コミュニティの訪問などを通して環境教育、女性の就労スキル向上のための活動を実施。

(現在) 埼玉県和光市 コミュニティカフェ「アルコリス」経営



▲協力隊時代に再発見した、地域の個性

帰国後から広がる 縁と出会い。



協力隊時代に再発見した、地域の個性。

横田さんは青年海外協力隊としてメキシコのテオセロ市に派遣され、市役所が注力していたミズコンポストの普及に奔走しました。

当初は配属先との活動方針のすり合わせが上手く行きませんでした。2年目に新しい同僚が配属された事で様々なアイデアを具現化する事が出来ました。

そんな横田さんの活動を支えていたのは現地のメキシコ人のコミュニティでした。隣近所分け隔てなく助け合い、笑い合う姿に、先進国の人々が忘れてきている大切なものがあることに気が付きました。その姿に段々と惹かれていった横田さん。人と人の繋がりや、それぞれの地域の面白さにメキシコで気が付いたのです。



横田明菜さんは埼玉県和光市でコミュニティカフェ「大人の秘密基地arcoiris」を経営しています。「大人の秘密基地」と名付けられた空間にはどんな想いが込められているのでしょうか。



▲和光探検博覧会「和こたん」を開催。市内いちご園での体験イベント

ベッドタウンから、ホームタウンへ。

帰国後に実施する和光市への帰国表敬訪問には、地域新聞の記者が同席しました。

テオセロ市で取り組んだミズコンポストの話題になると、市長、新聞記者、横田さんの3人で話が盛り上がりました。市長もミズコンポストを自作しており、記者も堆肥に関心を持っていたのです。

これがその後の様々なアクションに繋がりました。横田さんは、地域新聞や農業体験センターと連携し、和光市による地域活性化を目的とした体験型イベントの実行委員に就任します。ベッドタウンとして東京都に接する和光市ですが、横田さんたちは、ここを愛着あるホームタウンに変えようと取り組んでいます。

その取り組みの奥底には、メキシコで感じた、地域の人間関係が力強さ、面白さを和光に取り戻したいという意気込みがあります。

地域の「アイデンティティ」はどこにある!?

2014年には「大人の秘密基地arcoiris」を開店。食材は和光市の農家や市内の商店から仕入れる地産地消のコミュニティカフェで、夜はコミュニティスペースとして利用されます。

「人が集まり話をする事で新しい場が生まれるきっかけになると思います」と横田さん。「お互い向き合って話す機会が少なくなった日本、それが現代の様々な問題を引き起こしているのではないのでしょうか。人々が集まり話合える場が、力強く包括的な社会を作る礎となるはず」と語りました。

人々がそれぞれの力を発揮して、和光市を変えていく原動力となり、その力が地域のアイデンティティとなっていく、大人の秘密基地arcoirisは、その発信元です。



▲市委託事業の転入者向け地域情報交換サロン「まちナビ・サロン」の様子

青年海外協力隊

Mikayo Kuboyama

久保山三香代



(派遣国) セネガル
(派遣期間) 2009年3月～2011年3月
(職種) 日本語教師

千葉県松戸市出身。セネガルの首都ダカールにあるアフリカ高等経営センターで、第二外国語として日本語を研修生に対し指導。その他にも日本を紹介するイベント「日本祭り」やセネガル日本語スピーチコンクールなどを企画・運営した。帰国後は中学校の学校事務職に復帰。(現在)千葉県松戸市 学校勤務&日本語ボランティア



▲たくさんの日本語を話せるように、和気あいあいな雰囲気です

青年海外協力隊とは、 自分へのチャレンジと ステップアップ！



セネガル

「自己啓発等休業制度」を使って現職参加！

久保山さんは高校卒業後、学校事務として中学校に勤務。プライベートで海外旅行を経験するうち、自分も海外で何かしてみたいという気持ちが芽生えました。そこで思い付いたのが自分の国の言葉を教える=日本語教師でした。1年間の夜間コースで日本語教授法を学んだ後、松戸市日本語ボランティア会に所属し、週1回のボランティア活動を行いました。そんなとき、同僚

から青年海外協力隊に仕事を辞めずに参加できるチャンスがあることを聞いたのです。そこで、「自己啓発等休業制度」を利用して、現職のまま青年海外協力隊に参加することを決めました。「すべては、タイミングだった。」と振り返る久保山さん。2年間の任期を終えて休職していた学校事務に復帰し、協力隊経験は「自分へのチャレンジとステップアップだった!」と考えています。



2年間の任期を終え、休職していた学校事務に復帰した久保山さん。協力隊を振り返ってもらおうと、「自分へのチャレンジとステップアップだった!」との力強い返事が返ってきた。どんなステップアップに繋がったのか？



▲帰国後は仕事をしながら地域の日本語ボランティアとして活動中

自分はすごく変わった気がする。不思議と！

帰国後は、学校事務に復職。セネガルでの経験から、学校をより良い方向に変えていこうと自分から積極的に提案するようになりました。今まで見過ごされていた事務処理の課題も久保山さんのアイデアと粘り強さで2年後には見事改善されたそうです。

また、週一回の日本語ボランティアも継続しています。協力隊参加前に比べ、難しい生徒の指導・対処が上手になり、臨機応変な対応ができるようになりました。それはフランス語で指導するセネガルでの授業や指導がより大変だったからだと考えています。日本に帰国してから、久保山さんは、様々な場面で自分の変化を感じるそうです。

日本語を教えるうえで重要なのは、文化も一緒に教えること。

久保山さんは、帰国後、学校や研修会など色々なところから声がかかり、「テランガ(おもてなし)の国、セネガル」と題したボランティア体験談を実施しています。体験談のなかで、久保山さんは、「日本語を教えるうえで重要なのは、文化も一緒に教えること」であり、言語と文化をリンクさせて学ぶことが重要だと話しています。

2011年9月には、松戸市国際交流協会の依頼により「まつど国際文化大使」に就任しました。久保山さんは「まつど国際文化大使」として、地域のイベントや老人クラブに招かれ、セネガルの文化を伝えるボランティア体験談や日本舞踊などを披露しています。



▲「まつど国際文化大使」として、色々なイベントでセネガルを紹介

青年海外協力隊

Chihiro Akutsu

阿久津千尋

東京都



(派遣国) チュニジア

(派遣期間) 2007年1月～2009年1月

(職種) 青少年活動

東京都葛飾区在住。チュニジアでは、聴覚障害者の職業訓練校において、4～18才を対象に情操教育と職業訓練の授業を担当。図画工作クラスのほか、鞆やフェルト製品作りのための洋裁教室、特産品である陶器の絵付け指導などを行う。チュニジアでは、聴覚障害者の社会参加を支援しました。帰国後は、その土地の人々や文化と深く関わり合うことで見えてくる「地域の魅力」や「価値観の違い」を、葛飾の文化芸術振興と地域社会の「内なる国際化」に生かしています。
(現在)東京都葛飾区 Atlier 485 運営



▲職業訓練校の生徒と阿久津さん

“生きる力”を育んだ
アートの中で、
下町「葛飾」に新たな風を。



チュニジア

草の根外交だからこそ体感できる、イスラム文化の魅力。

青年海外協力隊参加前は、アートギャラリーに勤務しながら、ボランティアとして小児科病棟でのアートワークショップに携わっていた阿久津さん。

チュニジアでは、視覚障害の子どもの対象に指導を行いました。小規模校のため地域社会と深く関わることがで

き、生徒の家に招かれることも多かったそうです。

密な人間関係により、イスラム世界の文化、生活、習慣への理解が深まり、「日本におけるイスラムへの偏見や誤解を払拭したいと考えるようになりました」と阿久津さんは語ります。



チュニジアで聴覚障害者の社会参加を支援。その土地に根付く人々や文化と深く関わり合うことで見えてくる「地域の魅力」や「価値観の違い」を、葛飾の文化芸術振興と地域社会の「内なる国際化」に生かす。



▲「川の間」イベントの1つとしてアトリエで作品を展示

アトリエ開設 アートの発信と交流の場を地域に。

帰国後、阿久津さんは学校などで協力隊経験を語る出前授業を70回以上行い、イスラム文化の魅力や日本との価値観の違いを紹介しています。また、ご主人と共に下町情緒あふれる葛飾区柴又に“Atelier485”をオープンしました。ここでは、アトリエの運営や展覧会・演劇イベントの企画を行っています。人と町を繋ぐ交流の場としても機能しており、「葛飾は文化芸術の面で、都内でも取り残されたような地域。『葛飾にこういう場所が欲しかったんだよね』と声を掛けてもらえるようになりました」と笑顔の阿久津さん。

「アートと地域」を繋げた先に見えてくるもの。

アトリエの活動をきっかけに人の輪が広がり、町・人・文化を繋ぐ地域密着型の文化芸術振興イベント“川の間”の立ち上げにも関わりました。阿久津さんは海外居住経験のある方々を招き、体験談と現地料理を味わいながら異文化を学ぶワークショップ“川の間七大陸食堂”をコーディネートし、チュニジアの習慣やベルベル料理を紹介したところ好評でした。「協力隊参加前から、社会におけるアートの役割やアートに変換することで表現できることは何か、という意識を常に持って歩んできました。とても大きなカルチャーショックと物事を多角的に見る必要性を教えてくれたチュニジアの経験は、何よりの宝物です」と語る阿久津さん。草の根レベルで芽吹いたアートの力は、地域に活気をもたらし、「多文化共生」という新たな息吹も運んでいます。



▲チュニジアの衣装をまとい、協力隊経験を紹介する阿久津さん

青年海外協力隊

Takeshi Kawachi

河内 毅

新潟県



グアテマラ

(派遣国) グアテマラ
(派遣期間) 2002年6月～2004年6月、2005年5月～2007年5月
(職種) 森林経営(1回目)、村落開発(2回目)

静岡県裾野市出身。青年海外協力隊に2回参加。1回目の派遣では森林のデータベース構築支援と日本式炭焼きの指導ならびに普及を実施。2回目の派遣では、農村の生活改善のため、農民グループや女性グループの組織化や農作物の生産向上などに取り組んだ。
(現在)新潟県長岡市 公益社団法人 中越防災安全推進機構



▲東日本大震災ボランティアバックアップセンターでの活動の様子

「防災」で地域の力を引き出し、生き生きとした社会づくりを。



グアテマラ

協力隊の経験を活かして災害復興支援に携わる。

新潟県中越大地震の3年後、河内さんは中越に入り地域主体の復興に携わってきました。現在は災害支援活動の他、各地で防災力向上のためのワークショップを開くなどの活動をしています。「中越は神戸から多くを学びましたが、東日本へは中越の教訓を十分に伝えられませんでした。例えば、阪神の教訓から中越の復興ではコミュニ

ティが重視されました。また、新潟県中越大地震を通して平時からの支援団体間の顔の見える関係性と災害時に連携・協働することの重要性を学びました。こうした教訓を災害経験のない地域に伝え、減災の備えにつなげることが重要だと考えています。」河内さんが日本の地域に入るうと思ったきっかけは、協力隊での体験にありました。



協力隊の経験が日本の農村に目を向けるきっかけとなった河内さん。帰国後は2004年の新潟県中越大地震の被災地に入って復興支援を行った後、現在は災害支援活動や防災の視点から住民主体の地域づくりを考え、活動しています。



▲グアテマラでの農民とのワークショップの様子

グアテマラの農村のコミュニティの力と住民の行動力。

グアテマラでは、子ども達のきらきらと輝く目、地域ぐるみで子どもを育てるコミュニティの存在、そして自分も家族同様に受けて入れてくれる人々の温かさに接し、本当の豊かさとは何かを考えさせられたといいます。また、人々と一緒に活動する中で、主体性とは何かを考えさせられるきっかけになったそうです。「農村の女性達の組織化を手伝っていた時のことです。彼女達は自分達で二ワトリの肥育プロジェクトをしたいと言ってきたのですが、瞬間に自分たちで銀行から融資を取り付け、ヒヨコを買ってきてしまいました。その行動力に感心すると同時に、自分自身を振り返り恥ずかしくなりました。」帰国後、どこか地域で活動できないかと考えていたところ、中越で活動する人たちに会いました。

相互依存のネットワークで災害に強い社会をつくる。

災害支援活動に関わる中で、河内さんは、支援者が被災者に支援をし続けるのではなく、逆に「ありがとう」と被災者に言えるようになることが一番の支援であると感じたそうです。「相手に頼ることは相手に主体性や可能性を与えること。相互依存のネットワークを構築し活用することが、災害にも強い生き生きとした社会づくりにつながるのではないか。」長岡ではそんな災害にも強い、様々な団体が連携した地域づくりが始められています。しかし「防災の指導者やコーディネーターは不足している」と河内さんは言います。「全国各地に広く災害の知見を伝え、人と人をつなぎ、人を育てていくことが必要です。」河内さんの挑戦はこれからも続きます。



▲協働型の災害支援体制構築のための勉強会の様子

青年海外協力隊

Setsuko Saito

斉藤節子



(派遣国) **グアテマラ**
(派遣期間) 2009年3月～2011年3月
(職種) **看護師**

群馬県前橋市出身。現職参加でグアテマラの病院で活動。乳幼児死亡率低下のため、母親や妊産婦に向けた、育児・栄養・衛生に関する教室の開催や巡回指導を行った。帰国後は、看護師として病院で勤務しつつ、医療通訳の普及活動を行う団体に所属し、活躍中。
(現在)群馬県前橋市 病院勤務&「群馬の医療と言語・文化を考える会」



▲母親教室での栄養指導
(斉藤さんがスペイン語で、同僚がマヤ語で通訳)

外国人に優しい
医療の提供を。
医療通訳のできる
看護師を目指す。



伝えるための手段——通訳の存在。

看護師としてグアテマラに派遣された斉藤さん。グアテマラには、マヤ民族の文化が色濃く残っており、公用語こそスペイン語ですが、地方の住民はマヤの言葉話す人も多かったそうです。そのため、住民と話す時に、スペイン語で話した内容をマヤの言葉に訳さなければ、理解してもらえないことも多々あったそうです。そんな時に力

になってくれたのは、通訳を引き受けてくれる現地スタッフでした。斉藤さんはこのような経験から、住民に必要な情報を伝えるには通訳という立場の人が重要、と感じたそうです。また、「任地で体調を壊した時、とても心細かったです。文化が違う土地で病気になることは、精神的な負担が大きいですね。」と話します。



群馬県内の病院で働く斉藤さん。グアテマラでの言葉の壁の経験から、日本に住む外国人が安心して医療行為を受けられる支援が必要だと考えています。そのための医療通訳を目指した活動を行っており、地域の注目を集めています。



▲低体重児、母親との交流(スペイン語と、片言のマヤ語で会話)

日本語だけでは不十分な医療現場。

帰国後、斉藤さんは病院に復職、看護師として働きます。その中で、人数は多くないものの、外国人の患者さんも入院してくるそうです。「みんな、片言の日本語は通じるのですが、医療に関する説明をするとあまり理解できていないようです。」と斉藤さんは打ち明けてくれました。日本語のできる家族や友人が通訳代わりに来院することもあるそうですが、そのような協力者がいない人も多そうです。「スペイン語が通じる患者さんに、検査や生活指導などをスペイン語で説明すると、理解度が深まり安心してくれます。」と斉藤さん。日本語の説明だけでは十分に理解していないまま、医療行為が進行してしまうことを危惧し、医療通訳に興味を持ち始めたそうです。

グアテマラで習得した語学力と専門を生かして——医療通訳。

勤務先で行われていた医療通訳ボランティアの勉強会への参加がきっかけで、斉藤さんは現在、『群馬の医療と言語・文化を考える会』という民間団体に所属し、医療通訳や防災知識の普及活動、語学や医療通訳に関する勉強会を定期的に行っています。外国人居住者が増えている群馬県では、医療通訳のニーズが高まっており、斉藤さんのように医療通訳のできる看護師の活躍が求められています。「母国語でのコミュニケーションは外国人患者の精神的安定にも重要だと考えられています。外国人の方も、日本人と同様に、病気や治療に関する情報を得て、安心して医療を受けられるよう語学を生かしてサポートしていきたいです。」と抱負を語ってくれました。



▲医療通訳勉強会の様子(実際の通訳場面をロールプレイ中)

青年海外協力隊

Kazuki Ishinuma

石沼一紀

(派遣国) ケニア
(派遣期間) 2006年3月～2008年3月
(職種) 自動車整備

埼玉県さいたま市出身。ケニア・ナクル湖国立公園を管理しているケニア・ワイルド・サービスにおいて、各公園に設置されている整備工場の整備士を対象に、車両の維持管理と自動車整備・板金に関わる協力を実施。
(現在)ケニアIT専門学校、アフリカ向け中古車輸出会社経営



変化のない日常がいかに大切かを教えてくれた。

ケニアで自動車整備・板金の活動をした石沼さん。帰国後もケニアと日本の架け橋として、IT学校の設立、ケニアへの日本人インターン生の派遣、中古車輸出など積極的に活動しています。



ケニアで体感した、 国境なき人の繋がりが。

石沼さんは自動車整備士としてケニアのナクルへ派遣されました。ボランティアとしてケニアに派遣される前、石沼さんは、世界中を旅していましたが、先進国ばかりでした。自分がさらに成長するために、青年海外協力隊への参加を決意し、合格への足掛かりとして、苦手だった英語を克服するためにオーストラリアへの語学留学を行いました。

派遣前は、ケニアの治安や情勢に不安がありましたが、赴任して現地の生活に馴染むことで解消されました。人と人同士の情によって結ばれる間柄には、「日本人」や「ケニア人」という隔てはありません。国や国籍が違っても、そこにいるのは同じ人間だという事に気が付いたので、自身の成長を目指して途上国に飛び込んだ石沼さん。そこで得た経験や想いが新しいステージで活躍する原動力になっています。



▲赴任後、初めて見学したケニア・ナクル公園内のパブーンクリフの丘の上で

仲間見た途上国の課題 そこにケニアと自分の成長がある。

「途上国では改善や発展が重要視されますが、まず、継続することが難しい場合も多くあります。そうした問題に直面した時どうやって支援

するか、そこが苦悩や葛藤の連続でした。常に新しいことに挑戦し続ける気持ちを持ち続けることも大切です。途上国では支援の形やニーズが目まぐるしく変化しますので、それに対応できる柔軟性と行動力も必要です。」と石沼さんは語ります。



▲機材不足の中で車両の修理方法を考え中

成長に繋がった協力隊経験と、帰国後の責任。

また、「協力隊活動は現地での活動を満了して、はい、お終い、ではない。自分が肌で触れてきた事を日本国民に発信していく、知ってもらえる事が重要だと思います。」と石沼さん。この考えとケニアへの思いを胸に、石沼さんはナクルにIT系の専門学校を設立しました。さらに日本の若い世代への支援として、ケニアの専門学校へ日本のインターン生を派遣する形で次世代の国際協力人材育成にも力を入れています。今後はアフリカ向け中古車の輸出も計画しています。



▲同僚と手でガソリンを入れている様子

青年海外協力隊

Kazuyoshi Ishii

石井和由

(派遣国) タイ王国
(派遣期間) 2009年1月～2011年1月
(職種) 観光業

千葉県千葉市出身。チュンボン県チュンボン郡役所に所属。タイ王国政府観光庁チュンボン事務所と共に、国内外の観光客誘致に向けてのプロジェクト・プログラム作成支援を実施。
(現在)千葉県千葉市 千葉県庁



帰国後に、国際貢献活動制度を活用して県の職員へ!

「海外で自分のチカラを試したい。」と感じて参加した青年海外協力隊。石井さんは、タイでのインバウンド観光業務を経て、現在県職員として千葉県でのインバウンド観光に携わっています。



地域の魅力を活かした マングローブ植林ツアーで大成功!!

石井さんの任地は、首都バンコクから南に460km下ったチュンボン県。チュンボン県は南タイへの玄関口ではあるものの、滞在せず通過してしまう観光客が多い。どうにか観光客に滞在してもらえないかと考え、石井さんがまず目を付けたのは、タイで流行していた植林ツアー。地域の魅力を活かし、マングローブ植林ツアーを企画したところ、バンコクの企業が社員旅行として参加するなど大きな反響があった。その成功から同様のツアーを県内ゲストハウスに滞在している外国人観光客にも展開した。これらのツアーは、自分が植えたマングローブに名札を付けられるように工夫し、数年後も自分のマングローブの成長を見に来てもらえるようにした。また、バンコクに住む日本人の子どもたちにも「本当のタイを感じてもらいたい。」と考え、同様のツアーを企画した。ツアーは、マングローブ植林のほかに、ホームステイを通して、現地の食べ物や水シャワーの体験、海岸清掃などの教育的要素を取り入れ、現在も続くツアーとなっている。



▲マングローブ植林の説明をする石井さんと同僚

価値観の違いを理解させるには?

一番大変だったのは、やはり価値観の違いだと話す石井さん。タイには、地図がなく地図を使う習慣がなかったため、外国人観光客向け地図

や案内板の作成が必要だと感じていた。同僚に何度も地図の重要性を伝えたが、全く理解してくれなかった。そこで石井さんは、まず自分で地図を作り、ゲストハウスに配架してもらうように配った。多くの外国人観光客が愛用している姿を見せ、同僚に地図の重要性を理解させることに見事成功した。最後には一緒になって案内板を立てることができた。



▲一緒に汗を流した役所の仲間

アジアに住んだことでアジア人のメンタルがわかるようになった。

石井さんは、帰国後旅行会社に1年勤務し、その後国際貢献活動制度を活用し県の職員となった。現在、県の観光誘致促進課で、いかに外国人観光客を日本へ呼び、いかに千葉県へ連れてくるかを考えている。青年海外協力隊で活動した内容と同じ業務を現在担当しているという。青年海外協力隊で得たことは、「アジアに住んだことでアジア人のメンタルがわかるようになった。日本の常識で物事を捉えないという習慣が身についた。」と語ってくれた。石井さんは、協力隊の経験をもとに、アジアと千葉を飛び回っている。



▲今も続くタイで人気の植林ツアー

<https://www.jica.go.jp/volunteer/index.html>

国際協力機構 青年海外協力隊事務局



JICA 東京 各窓口



独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

東京国際センター

<https://www.jica.go.jp/tokyo/>

東京 (東京国際センター)	〒151-0066	東京都渋谷区西原 2-49-5	(代表) 03-3485-7051
多摩地区デスク	〒192-8501	東京都八王子市元本郷町 3-24-1 八王子市役所内市民活動推進部多文化共生推進課内	042-620-7437
埼玉デスク	〒330-0074	埼玉県さいたま市浦和区北浦和 5-6-5 浦和地方庁舎 3F (公財) 埼玉県国際交流協会内	048-833-2992
千葉デスク	〒261-7114	千葉県千葉市美浜区中瀬 2-6 WBGマリブイースト 14F (公財) ちば国際コンベンションビューロー内	043-297-0245
群馬デスク	〒371-0026	群馬県前橋市大手町 2-1-1 群馬会館 3F (公財) 群馬県観光物産国際協会内	027-243-7271
新潟デスク	〒950-0078	新潟県新潟市中央区万代島 5-1 万代島ビル 2F (公財) 新潟県国際交流協会内	025-290-565